

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：84202

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16907

研究課題名(和文) 宮座文書における「差定状」の管理史および儀礼史の解明：物質文化研究の視点から

研究課題名(英文) Revealing the History of Management and Rituals of Sajo-jo Documents in Miyaza Archives: From the Viewpoint of Material Culture

研究代表者

渡部 圭一 (WATANABE, Keiichi)

滋賀県立琵琶湖博物館・その他部局等・学芸技師

研究者番号：80454081

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では滋賀県および周辺地域の伝統的な祭祀組織である宮座で管理されてきた文書のフィールドワークを行い、とくに「差定状」とよばれる古いタイプの文書が、さまざまな宗教儀礼をともないながら、宮座組織のなかで長期的に管理されてきたことを見出した。これにより、これまでの研究では中世後期には衰退・消滅すると考えられていた古典的な頭役祭祀が、中近世移行期の村社会でも存続することが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this study we conducted fieldwork focusing on miyaza archives in Shiga prefecture and surrounding areas. We found out the most classic type of documents called sajo-jo have been managed over the long term by miyaza groups, accompanied with various religious ceremonies. We revealed that the toyaku-saishi, which was thought to be declining and disappearing in the latter half of the Middle Ages, actually survives in the village society under the transition period of the Middle and the Modern Era in Japan.

研究分野：民俗学

キーワード：差定状 頭役祭祀 宮座文書 中近世移行期 文書管理 文書儀礼

1. 研究開始当初の背景

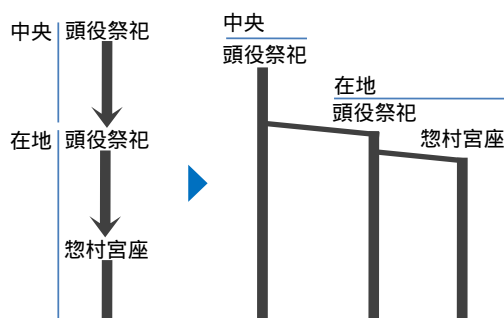
近畿地方を中心とする日本の村落では、15～16世紀に広く宮座文書が形成される[萩原1975]。従来の歴史学・民俗学における宮座文書の扱いは、特定の時代の情報を部分的に読み取る程度に止まり、宮座文書のもつポテンシャルを正當に捉えてきたとはいえない。これを打破するには、個別の文書の内容だけでなく、「もの」としての文書をめぐる習俗(祭祀組織における管理や儀礼など文書をとりまくコンテクスト)を総体として考究する必要がある。

2. 研究の目的

従来の宮座文書の理解では、年齢階梯制における「入衆帳」(毎年の新加入者・年齢の記録)が典型とみなされてきた[大越1974]。また従来の研究では、宮座形成の舞台として中世後期(主に14～15世紀)の近畿地方の惣村のみが重視され、それ以前から各地の寺社で行われていた頭役祭祀は惣村宮座に吸収される一種の“遺制”にすぎないと消極的に考えられてきたが、これには大幅な見直しの余地がある。

ここで注目する「差定(さじょう)状」とは、平安時代以降における有力寺社の頭役祭祀に特有の儀礼文書である。頭役祭祀は早い段階で衰退・途絶するとされてきたことに関連して、これまで差定状の事例研究は全く行われてこなかったが、実際には、はるか時代を隔てた今日の村々の宮座文書にも差定状に酷似する様式のものが含まれる(以下「村の差定状」とする)。

本研究ではこの差定状を有力な指標として、差定状を有する祭祀組織(とくにその文書管理および文書儀礼)に分析を加え、古典的な頭役祭祀の組織が今日に至るまで活発に活動してきた事実を明らかにし、これまでの宮座研究の通説に代わる新たなシエマを提案する。



左:従来の祭祀組織の変遷モデル(単線的な発展過程)
右:本研究が提案する変遷モデル(複線的な成熟過程)

3. 研究の方法

本課題では、現行の「村の差定状」の実例を網羅的に調査対象とする。調査はフィールドワークを基本とし、近江国の差定状の原本および祭祀儀礼の調査、近江国以外の頭役祭祀の調査を段階的に実施した。

近江国においては複数の新出の差定状原

本を精査しつつ、これにともなう差定儀礼の調査を行い、文書管理史と文書儀礼史のデータを集積した。あわせて典型的な惣村宮座とされる事例についても、差定という観点から再検討を行った。

近江国以外については、地域差に留意しつつ、年齢階梯よりも家格差による株座が発達する大和国を対象として、頭役祭祀・差定状(ないしそれに類似する儀礼・文書)の調査を行ったほか、関東地方の近世初期の頭役祭祀文書の調査を実施し、近江および畿内近国で得られた知見の一般モデル化を進める根拠とした。

4. 研究成果

(1) 近江国の「村の差定状」の調査成果として、「ずいき祭り」で知られる御上神社(野洲市三上)と大笹原神社(野洲市大笹原)において、差定状原本を含む未紹介の頭役祭祀文書・儀礼の調査を行った。また「すし切り神事」を伝える下新川神社(守山市幸津川)では、神事の場に掲示される「差定書」と、その背景にある当番組ごとの大量の引き継ぎ文書の存在が明らかになった。また「当役」の組織名を有し、多彩な祭礼と文書・組織をもつ近江八幡市南津田の調査を並行して実施した。

これらの事例は、古典的な頭役祭祀とそれを体現する差定状という文書が、近世以降の社会においても依然として活動的であったことを雄弁に物語っており、頭役祭祀が惣村宮座に吸収・消滅するという従来の見解を批判的に見直すことにつながるものである。とくに「個人を差定する」という古典的な祭祀組織の原理が健在であることは注目に値する。

(2) 近江国の多賀大社(多賀町多賀)の差定儀礼と文書の調査では、鎌倉期からの頭役祭祀で知られる「馬頭人祭」について、年頭の差定式に始まる祭祀の全行程を記録するとともに、近世～近代期の神社文書、旧坊人家の文書、過去に馬頭人経験のある村の文書などの調査を実施することができた。

これによると多賀社の馬頭人の頭役忌避問題は近世にも頻発しているが、その反面で、神社側でも近世中期には差定圏を大幅に拡大し、安定的な頭人供給の体制を模索していたことが明らかになった。一方で在地の側では祭祀集団の形成や文書管理はみられず、差定主体側の一方向的な差定・文書発給が行われている点に特徴が見いだせる。

(3) 近江国以外での調査結果として、奈良県五條市で新出といつてよい中世末期「頭文」の原本調査の機会を得たほか、差定文書ではないが、奈良県天理市の大和神社の宮座でも、慶長期に始まる引き継ぎ文書の撮影・調査が実現した。

また、初期の頭役祭祀文書は存在しないと思われていた関東村落で、近畿地方に匹敵する17世紀代初頭のオビシャ文書が相次いで(再)発見された。当初の研究計画にはない対象であったが、本研究が意図する祭祀組織の変遷モデルの検討に重要な意味をもつ素材であることから、研究対象に加える判断とした。

大和国では家格差に基づきいわゆる株座組織が発達しており、臈次に基づく長老組織は痕跡程度にしか見いだせないケースが多い。このような「家」単位による祭祀組織の再編は、16世紀に列島規模で起きたいわゆる近世化(地縁的な家・村を基礎とする伝統社会の形成)の範疇で理解しうる。

南関東のオビシャ文書は、時期的にはいまのところ慶長期を上限としているが、関東の村の祭祀集団の歴史をみるうえでは最古の事例である。そこでも草分け百姓の家々を主体とした組織形成と文書の管理が、17世紀前半というかなり早い段階で見出される。ここでは「家」単位の再編という動向に地域差がないという知見が重要な意味をもつ。

(4)以上の知見をふまえると、本研究の課題である祭祀組織変遷のモデルは、下記のとおり3つの点で再構築することができる。

一般に中世後期には衰退・消滅すると考えられてきた古典的な頭役祭祀は、中近世移行期の村社会でも被差定圏を再編しつつ持続的に展開する。従来の研究は“古い頭役祭祀から新しい惣村宮座へ”の段階的な移行を想定してきたが[浦西 2010、真野 2010、高牧 1986、豊田 1982、萩原 1962 など]本研究の成果は、必ずしも惣村宮座に収斂しない祭祀組織の複線的な伝統の存在を示唆している。言い換えると、頭役祭祀はあくまで祭祀組織の一類型として捉えるのが実態に近いといえる。

16世紀～17世紀前半の祭祀組織は、近世化する日本の社会で形成されたいわゆる「当屋祭祀」として包括的に類型化できる。これは列島規模で生じた、地域差をもたない祭祀組織類型である。これに対し、近江国・大和国の臈次(年齢)階梯制の祭祀組織(狭義の宮座)は、中世後期の惣村に直接的に由来するものであり、その意味ではごくローカルな祭祀組織類型であると位置づけるのが適切である。

頭役祭祀という古い類型に対し、臈次階梯制による「惣村宮座」や各地の「当屋祭祀」は、若干の時間差をもつものの、16～17世紀にはすべてが出揃う。これらは単純な移行関係にあるわけではなく、むしろ同時並行で地縁的な成熟を遂げつつ、今日みられるような祭祀組織の地域的多様性を構成してきたと考えることができる。

引用文献

浦西勉 2010 『仏教と宮座の研究』自照社出版
大越勝秋 1974 『宮座』大明堂
真野純子 2010 『宮座祭祀儀礼論』岩田書院
豊田武 1982 『宗教制度史』吉川弘文館
萩原龍夫 1975 『中世祭祀組織の研究(増補版)』吉川弘文館
藤井昭 1987 『宮座と名の研究』雄山閣

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

渡部圭一、2018、宮座、日本宗教史のキーワード(大谷栄一ほか編、慶應義塾大学出版会) 143 - 149、査読無

渡部圭一、2018、コンテクストにおける文書の民族誌、現代民俗学のフィールド(古家信平編、吉川弘文館) 68 - 84、査読無

渡部圭一、2017、近代移行期の「村の年代記」越谷市越巻中新田のオビシャ文書、埼玉民俗、41 : 67 - 79、査読無

渡部圭一、2016、生活と習俗の史料学序説、現代民俗学研究、9 : 77 - 81、査読無

渡部圭一、2016、頭役祭祀における禁忌と神職、淡海文化財論叢、8 : 259 - 264、査読無

渡部圭一、2016、頭人差定文書の儀礼と管理 近江大篠原天王社の頭役祭祀を事例に、宗教民俗研究、24・25 : 52 - 71、査読有

渡部圭一・相場峻、2016、近世・近代村落寺院の経営基盤とその変容 寺院明細帳による分析の試み、市史研究いちかわ、7 : 1 - 13、査読有

渡部圭一、2016、地域自治会と「虫追い」の現在、埼玉民俗、40 : 109 - 127、査読無

渡部圭一、2015、頭役祭祀の再編と近代村落 頭人差定儀礼における神籤の変化を中心に、史境、70 : 66 - 82、査読有

〔学会発表〕(計2件)

渡部圭一、2016、関東の近世村落における宮座とオビシャ儀礼、日本民俗学会第68回年次大会・グループ報告

渡部圭一、2015、祭祀組織の「近世化」過程 関東近世村落における宮座の事例から、京都民俗学会第279回談話会

〔図書〕(計1件)

水谷類・渡部圭一(共編) 2018(予定) オビシャ文書の世界 関東の村の祭りと記録、

岩田書院、総ページ数未定

6 . 研究組織

(1)研究代表者

渡部 圭一 (WATANABE, Keiichi)

滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・学芸技師

研究者番号：80454081